7．兵庫県多可町岩座神地区調査成果報告会

岸　泰子・東　昇・菱田　哲郎

1．報告会にいたる経緯・報告会の目的 とプログラム

京都府立大学文学部歴史学科では以前より兵庫県多可郡多可町において、古墳（東山古墳群）や歴史的建造物の調査をおこなってきた。その縁から、2022 年度文化遺産学フィールド実習は多可町をフィールドとし、特に多可町加美区にある岩座神地区において調査を実施した。岩座神地区には日本棚田百選に選ばれている棚田景観、オトウ行事がおこなわれる五霊神社、江戸時代から継承されてきた地区所有文書など、さまざまな文化遺産がある。フィ―ルド実習では、景観・古文書・建造物・民俗などさまざまな視点から調査を実施した。

またこの後も岩座神地区では調査をさせていただく機会に恵まれた。山寺に関する科学研究費課題として、旧神光寺跡を踏査した。

このように岩座神地区では文化遺産に関する多種多様な調査を実施できたことから、多可町教育委員会ならびに地元の協力を得て、その成果を地元の方々に知っていただくべく、2024 年 6 月 15 日（土）、岩座神公会堂（多可郡多可町岩座神）において「京都府立大学歴史学科文化遺産調査成果報告会　岩座神の歴史と文化」を実施する運びとなった。

本稿ではその成果報告会の概要を述べる。なお、当日のプログラムは以下のとおりである。

①岩座神における棚田景観の現状と課題

栗栖萌々子（武庫川女子大学大学院建築学研究科専攻）

②岩座神の文化と生業―オトウ・棚田を中心に―

橋本唯（京都府立大学文学部歴史学科 4 回生）

③岩座神地区文書からみた江戸時代の神光寺と家族

東昇（京都府立大学）、渡部凌空、小島慧音（京都府立大学文学部歴史学科 4 回生）

④多可町の寺社建築―五霊神社を中心に―　岸泰子（京都府立大学）

⑤旧神光寺跡と多可町の古代山寺

菱田哲郎（京都府立大学）、山内愛弓（京都府立大学大学院史学専攻）

⑥座談会（学生、教員、安平勝利（多可町教育委員会）、地元の方々）　（岸泰子）

2．報告概要

①栗栖報告は、岩座神地区の棚田景観の現状と課題を整理した。さらに岩座神地区の中でも重要な資源といえる棚田を活かした地域づくりに関する提言をおこなった。

②橋本報告は、景観史の視点から棚田の特性について述べた。ついで、多可町全域に残って

いるオトウとよばれる地縁組織をとりあげて、岩座神地区（五霊神社）でおこなわれるオトウ行事、特にオトウワタシと呼ばれる行事の特性を報告した。（岸）

③東ほか報告では、岩座神地区における歴代区長が保存してきた江戸時代の庄屋文書や明治以降の区有文書、計 464 点の概要を説明した。幕末維新期の宗門人別帳を用いた分析からは、岩座神村の戸主が高齢であり、子どもや孫世代が他村より多いことが判明した。神光寺については、嘉永 6 年（1853）の仁王門修復時の世話人から、多田川、杉原川沿いの計 27 か村に広がる信仰圏の存在が確認された。また、享保 11 年（1726）製作の釣鐘が、岩座神神光寺遺跡で発掘された梵鐘鋳造遺構の円形定盤と一致することが明らかになった。（東昇）

④岸報告は、建築史調査の成果として、岩座神地区にある五霊神社の建造物をとりあげた。その建築的特性を解説した後で、棟札から五霊神社を造営した大工について紹介した。また、その大工を含めて江戸時代から明治期にかけて多可町で活躍した大工の特徴について述べた。（岸）

⑤菱田・山内報告では、旧神光寺跡の踏査成果を紹介し、麓の岩座神神光寺遺跡とともに上寺、下寺の関係で古代より継続した山寺であることを紹介した。千ヶ峰を意識した山林の霊場として平安時代の初めには成立したと考えられ、その後の神光寺の活動と岩座神の棚田の形成が相関することを想定した。

３．座談会の概要と報告会の成果

座談会においては、地域のみなさんからそれぞれの発表内容に対する質疑があり、発表者に多可町那珂ふれあい館の安平勝利さんも加えて、それらに応答した。そのなかで岩座神の村と神光寺、五霊神社が歴史的に深い関係があることが改めて明らかとなった。とりわけ、神光寺が播磨でも屈指の山寺であるという点は、地域のみなさんの認識を改める結果となったと思う。そのため、この地域をガイドするうえでも重要な成果となったのではという意見もあった。最後に、地域のみなさんからは岩座神の棚田を今後どのように守っていくのかという点も話題となり、過疎地域における文化遺産の役割がクローズアップされることになった。短い時間ではあったが、地元のみなさんとともに文化遺産の将来を大学と行政が一体となって考える時間をもてたのではないかと思う。（菱田哲郎）

写真１　報告会の会場風景（１）

写真２　報告会の会場風景（２）

図１　岩座神における報告会の案内

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。（い）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第11号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2025年3月31日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2